東西とーざい

新しい発想の塗料 ラバーペイント

滋賀県・小野 隆浩

「面白い塗料があるよ！」野外の造形物が専門の先生から、この夏に声をかけられた。それが今回紹介する「ラバーペイント」である。塗料メーカーのAZから発売されているスプレータイプの製品で、価格や見た目は他のスプレー塗料とさほど変わらない（写真1）。もともとは車やバイク、ヘルメットなどをドレスアップするための塗料のようだが、ゴムコーティングしたような独特な塗装面が得られる。そして最大の特徴は、その塗装面を「ベリッ」と剥がすことができることであり、スプレー缶のボディにも剥がす様子が描かれている（写真2）。確かに車やバイクにカラーペイントする際には勇気がいる。うまく気に入った結果になれば良いが、色味的に気に入らなかった場合は、塗装を溶かすか削る、もしくは上塗りするしか選択肢はない。しかしこの「ラバーペイントであればゴム状の被膜が表面にコーティングされているだけなので、文字通り「ベリッ」と捲る形できれいに剥がすことができる（写真3）。

メーカーのホームページを見ると、さすがに車のドレスアップ用品とのことで、ゴムらしいマット調の色だけではなくメタリック色や蛍光色もあり、中には変幻色（いわゆる玉虫色）という変わったものまで全23色あるようだ。使用に際しても特別なことはなく、数回にわたってスプレーして、ある程度塗装面を厚くした方が良いとのことである。ただゴム質の塗料のため粘着性があり、使用後はスプレー部分の空拭きが必要と注

写真1

写真2

写真3

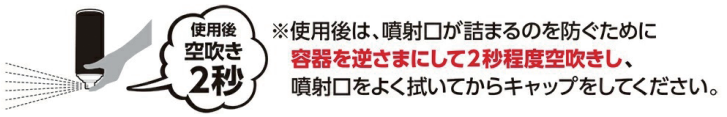

写真4

意書きがある(写真4)。

話は変わるが、クラシックの音楽会でもまれに譜面台や演奏者椅子の色を変えたい(変えてみたい)という要求がある。その際にまさか通常の塗装するわけにはいかないので、カッティングシートやテープなどを巻き付けて色を変えていたが、このラバースプレーがあればもっと多彩な色を使うことができる。また工具の持ち手部分を塗装すれば、ゴム質の特性を生かしてある程度のすべり止め効果も期待できる。同様の効果を狙って友人と数台分のスマホケースを塗装した学生もいて、その際に下地の色で「ラバーペイント」は発色が変わるという新しい発見もあった。

乾燥するとゴム状のコーティングになるという、新しい発想の「ラバーペイント」。単に着色だけではなく、布製のポーチや袋に吹き付け防水・耐水性を高める使い方もあるらしい。さらに独特の光沢を生かし、最近街中でよく見かける店舗のシャッターや壁に絵を描く「スプレーアート」に使用する学生もいて、使い方はアイディア次第で無限に広がる気がする。

(大阪芸術大学
びわ湖ホール)

夏の思い出

岐阜県・熊野 大輔

今年の夏の思い出について。

7月のおわりから8月のはじめにかけての5日間、有給休暇を利用して岐阜県羽島市にある不二羽島文化センターに通いました。「清流の国ぎふ総文2024　全国高等学校総合文化祭(総文祭)演劇部門」の会場です。そこで何をしていたかと言いますと、演劇部門の分科会のひとつである「舞台技術創造講習会」に、講師の一人として仕込みから本番まで参加していました。講師と言っても私の場合は、現地採用の音響オペレーターですので、助手といったところです。自宅から文化センターまでは車で20分程度。普段の勤務先より近くです。講師である藤田赤目さんと対面でお会いしたのは「2018信州総文祭」における舞台技術創造講習会での現地音響オペレーターとして参加したとき以来6年ぶりです。メールや電話、オンライン飲み会などでちょくちょく連絡を取っていたので、対面が6年ぶりとはわれながら驚きです。この6年の間に私は長野県から岐阜県に移住しました。レポートにも書きましたが、私はこの、毎年会場の都道府県が変わる講習会で現在唯一の「2度採用された現地スタッフ」です。

講師の多くが私より年配ですが、みなたいそう元気です。毎夜、反省会と称して喉を潤しています。私にはとても真似できません。私が飲むのはもっぱら、炭酸水の入ったジョッキにアイスキャンディーが刺さった「ガリガリ君サイダー」です。しかし私も東京で働いていたころは、しょっちゅう仲間内で飲みに行っていたのですから、環境の変化とは恐るべしです。長野でも岐阜でも車通勤が一般的で、飲みに行くとなると、

運転代行サービスを利用するしかありません。長野ではホテルに泊まる人もいました。そこそこ大ごとなのです。そういえば反省会場の近くに広い駐車場を持つスターバックスの店舗があり、講師の一人が「スタバって、『車でわざわざ行くところ』だったんだ」と驚いていました。そうですよね、東京では「ちょっと寄るところ」ですものね。もっと言えば、田舎ではイオンも「おめかししてお出かけするところ」です。油断するなよ。

そんな具合に楽しく過ごした5日間が終わり、余韻を味わう暇もなく翌日は朝から勤務先ホールの管理業務です。こういうとき、自分はもう自営業ではなくサラリーマンなんだよなあと再認識します。次はそんなサラリーマンならではの「お盆休み」の話です。

8月中旬に休館日が二日続き、さらにそのあとの2日間夏季休暇を取得し、家族で過ごすことにしました。うち1日は、車で片道4時間かけて、長野県の木曽谷にあるおいしい菓子店に向かいました。長野県民だったころ、月に一度は来ていた店です。道中は道の駅をはしごして、団子を食べたりしながら向かいます。飛ばせば3時間かからないのかも知れませんが、せっかくの家族旅行です。白川茶の産地である白川町～東白川村（合掌造りで知られる白川郷とは別で、もっと南にあります）などを経由して景色を楽しみながらドライブしました。

ドライブ中に立ち寄った岐阜県加茂郡七宗（かもぐん ひちそうと読みます）町の道の駅にて。流れているのは木曽川水系の飛騨川。

朝7時過ぎに出発し、13時過ぎに木曽福島に到着。昼食をはさんで無事に菓子店に着きました。用意してきた大きなコストコの保冷バッグに洋菓子・和菓子を詰め込み、さらにジェラートを食べて（道の駅でソフトクリームも食べていたのに）家族3人ご満悦です。このあと私はお腹を壊しました。悔いはありません。

翌日は、舞台技術創造講習会の期間中に講師陣が連日訪れていた反省会場に、妻子を連れて行きました。鶏皮串がめっぽう美味しかったので、妻子に食べさせたかったのです。あいにくお盆期間中で原材料が不足していたようで、串は1席10本までと制限がかけられており、同じく原材料の不足のためガリガリ君ソーダも頼めませんでしたが、他のメニューもおいしかったです。中学生の息子は、居酒屋がどんなところか気になっていたらしく、雰囲気を楽しんでくれたようです。妻は、結婚して初めてのお盆休暇だと喜んでくれました。そうか、初めてだったかと感じ入った次第です。

そんな夏の思い出でした。

8月の日本考

東京都・齋藤 美佐男

杉並区高円寺南口商店街のすぐ近くに生まれた私の8月の思い出として記憶に残っているのは、その商店街を流す金魚売の声や風鈴の音、鍋を修繕する鋳掛け屋の金物を叩く音、たまに来る羅宇屋のピーと高い、キセルの調子を整える機械の水蒸気が吹き出る音等です。

1956年生まれの私の家にはテレビはまだ無くラジオが唯一の娯楽でした。そのラジオのチューニングを父や母が苦労して合わせていました。時計は勿論柱時計で物心がついた5歳頃の私は毎日朝になると踏み台に上りネジを巻くのが楽しみでした。8月6日の朝8時になると5歳頃の私の記憶には残っていませんが、そのラジオからは広島からの中継が有ったのでしょう。

3月10日の東京下町大空襲は良く知られていますが、こ杉並区高円寺も1945年（昭和20年）5月25日に空襲が有り、母も母の祖母や娘を連れて大宮神社の方面まで逃げて行ったと話していました。その空襲で高円寺駅を含め北口と南口の一部ではかなりの被害が有った様です。

商店街で風鈴の音などをのどかに聞いていた私は、戦争が有ったことなど気にも留めていませんでした。物売りの音の記憶が残っているこの夏の日も終戦から僅か15年経っているだけだったと、今思うと不思議な気がします。私の生まれる4年前には空襲で損傷した高円寺駅も改修され、その当時は戦争の傷跡を街の中に見つけることは出来ませんでした。プロレスの時間になると北口に有った街頭テレビの前には黒山のひとだかりが出来ていました。我が家の前には魚屋、八百屋、パン屋、雑貨屋などが入る私設の市場が有り「いらっしゃい、いらっしゃい」と威勢のいい売り声が我が家の薄い障子を通して聞こえてきました。近くに有った鶏肉専門の店からは、時々鶏の鳴き声が聞こえてきました。町には活気が溢れていました。ただ白い着物を着た傷痍軍人と名乗る人がアコーディオンなのかバンドネオンなのか判りませんが悲しいメロディーを奏でて物乞いをしている姿や、顔にケロイド負った人も見る事が有りました。これらの事で戦争を遠くに感じていたのだと思います。

8月6日広島。8月9日長崎。8月15日終戦？敗戦？。この年齢になって日本の8月を考える事が多くなりました。今年の7月には恒例になっている土浦での『ヒロシマ』という音楽朗読劇が有りました。この作品は広島電鉄が招集によって男性社員の人員不足に陥り、それに代わって女子学生が車掌や運転手となって活躍してあの日を迎へ、その体験をマリンバの音と共に語っていく作品です。8月に入ってからは文化座のワークショップとして一般向けではなく後援会の皆様向けに朗読劇『ひめゆり』の公演を1回のみ行いました。この作品は唯一の地上戦となった沖縄戦での女子学徒挺身隊の悲劇を描いています。9月に入り従軍慰安婦の問題を真正面から捉えたPカンパニー公演の『この瞳に透かされて』にも関わりました。9月下旬には沖縄のコザにおける日本人や

朝鮮出身者の女性と在日米軍人の関係を描いた『混沌の街　コザ・1950』をオフィス江原主催での公演が有りました。又、シアターχに於いて、１日限りの公演ですが、以前にも紹介した昭和20年８月７日の広島を描いた一人芝居『朝ちゃん』を５年ぶりに声優の堀絢子さんが「原爆詩集」の朗読と共に演じた作品にも関わりました。

子供の頃には無かった戦争に対する怖さと、そこに起こっていた、もしくは未だに起こっている悲劇と残酷さをこれらの作品を通して肌で感じてしまいます。多分演劇に係わっていたからこそ、この感情を持つことが出来たのでしょう。のほほんとした私の性格ではこの様な感覚はこの年齢になっても掴んでいなかったような気がします。演劇を通した知識と感情は演劇を作る側だけではなく、観客も充分受け取っていると感じます。

夏休み。街には紙芝居屋も来ていました。子供たちは口コミで「何時いつ、あの街角に、紙芝居屋が来るぜ」と言って太鼓の音に誘われてそこに集まっていました。これも口コミで飴細工屋が来る場所や時間も判っていて、みんな飴を切る鋏の音と口上を頼りに集まっていました。浅草近くの親戚の家に行く時には良く浅草で食事をしました。その浅草の雷門の前には羅宇屋が居て父も浅草に寄るとキセルの掃除を頼んでいました。浅草の羅宇屋も私が20代の頃には見かけなくなりました。父は街中で傷痍軍人を見かけると嫌な顔をして「あいつ等、偽物だよ」と呟いていました。３回も招集された父です。戦友も多く死んだと聞いています。南京にも南京攻略の直後に城門をくぐったという事をぽそりと話していました。そんな父ですから偽物と本物の違いを見抜いていたのかもしれません。父は90歳で亡くなりましたが戦争について自身の体験を含めて多くを語ってくれませんでした。

紙芝居も飴細工屋も見かけなくなった今ですが、今度は私達が父や、空襲に逃げ惑った母達に代わって声を出して戦争の悲惨さを語っていかなければならないと思っている今日この頃です。

ウクライナとロシアの戦争が、イスラエルがパレスチナのガザ地区で行っている戦闘が、未だに終結に向かう気配が有りません。

日本の８月は色々と考えます。８月を過ぎると何故か忘れてしまいます。日本の外の事も含め、８月以外でも考えなければなりません。

（東京演劇音響研究所）

パリでの思い出

東京都･坂口 野花

この猛暑の中、パリオリンピックも熱く盛り上がりましたね。開会式は競技場内に留まらず、パリの街全体を舞台にしていたのは粋だと感じました。

今から40年近く前の事が思い出されます。まだ何の仕事をしようかと迷っている頃の事です。興味があって始めたパントマイムの師匠ヴィザン林夫妻がたまたまパリで舞台の公演をしている時期に私はオーストリアのインスブルックに居て、朝４時半の電車に

乗ってミュンヘンで乗り換えてパリに向かうつもりでした。そんな時にスーツケースが壊れてミュンヘンで電車に乗り遅れてしまいました。そこで2時間待って4回乗り換えして行くかどうか、とても迷いました。ドイツ語圏で片言の英語も通じないし、その頃はユーロではなくドイツ貨幣に換金しなくてはならない。駅のトイレに入るのに小銭が必要だけど、早朝で両替も出来ないし、行き着けるかどうかもわからない。インスブルックに戻るのは簡単な事だったけれど、前に出ればきっとこの先の未来が変わる、そんな予感がありました。そんなこんなで4回乗り換えしてパリに到着。着いた時には日も暮れていて、遅刻してしまいましたが、舞台を観る事ができました。一輪車やアクロバット、パントマイムなどのIKUO三橋さん率いる大道芸の楽しい舞台でした。師匠をはじめ他のメンバーはパリのアパルトマンを借りていたので、その日はそこに図々しく泊めて頂きました。翌朝は朝市を散策。そこには豚の心臓や鼻をもぎ取ったままのものがそのまま売られているのに食文化のカルチャーショックを受けました。パリの蚤の市や画家のアトリエがある、モンマルトルなどに連れて行って頂き、あのレトロな感じにどっぷりと浸る事が出来ました。その日はパリ祭の前日だったので、夜に師匠たちと街に繰り出しました。花火が打ち鳴らされる中、街のあちこちで大道芸がみられました。大道芸の人が観客を選んで客いじりする時に師匠が選ばれて、弄ばれるはずが逆に師匠がマイムで弄んでいたのに、苦笑してしまいました。

翌日の早朝には私は移動しなくてはならず、パリ祭のパレードの練習をする毛並みの美しい馬たちが街路を歩行しているのに後ろ髪を引かれるうち、パリ東駅に到着。ご馳走して頂いた焼きたてのクロワッサンとコーヒーが格別でした。

後になってミュンヘン駅が私の人生の分岐点だったような気がしています。マイムの師匠や他のメンバーとの出会いが今の仕事に繋がったのです。あの時引き返していたら今があったのかわからない、と思うのです。

（東京演劇音響研究所）

2024年ミュージカルの旅公演　その2

神奈川県・千葉 治朗

皆さまおはようございます。劇団四季の千葉治朗です。

6月29日からスタートしました『ジーザスクライスト=スパースター』の旅公演も、いよいよ後半戦に入ってまいりました。劇団四季の旅公演は、「芸術文化が東京一極に集中しないよう、地方にも東京公演と同じクオリティの舞台と感動を届ける」という浅利先生のお考えで活動を行なっています。ですから1から3カンパニーぐらいが一年中旅公演に出ています。ファミリーミュージカルや、こころの劇場公演などの招待公演や子供用ミュージカルは、北は利尻島から南は石垣島まで公演しています。ジーザスのような一般公演のミュージカルだと、劇場が小さくセットを組むことが厳しいので、比較的大きな劇場のある都市で行い

ます。北は稚内、南は沖縄までになります。

今でさえ当たり前ですが、かつてミュージカルの旅公演を実現するための立役者は、マルチテープレコーダーのカラオケ再生でした。東京公演ではミュージカルは生オーケストラでやっていましたが、地方の劇場にオーケストラを連れて行くことが難しいので、旅公演ではオーケストラを録音してテープレコーダーの２台から３台出し再生で本番を行うことになりました。Vamp打ちなどの再生方法もその頃からやり出したと先輩から聞いています。

余談になりますが、浅利先生が生前時々話してくれたことは、「俺は裏方で音響をやっていてな、当時テープレコーダーがよく故障して、その度に品川のソニーに担いで行ったもんだ」と。稽古の時などに「音響、○○の音シフトできるか」と言われたりもしました。これは初期のテープレコーダー（SONY TC357など）を再生する時は、ボタンではなくシフトレバーを動かしていた時の名残です。また昔はレコードの音を直接再生した時もあったようで、「俺は針を落とすのが一番うまかったんだ」という自慢話もしてくれたことがありました。

劇団四季では2000年まで旅公演は8chのOTARI製MX5050 MK-Ⅱを２台使用して、バックアップで2TrテープやMDを同時回しして本番を行なっていました。本当にアナログテープレコーダーでやっていた頃は事故が多かったです。ここ数年はデジタル再生になって事故は激減しました。機材による事故が起きなくなったのはいいことですが、その分若いオペレーレーターはトラブル耐性が弱くなっているように思います。機材がフリーズした時に自分の頭もフリーズしてしまう。経験不足もありますが、できれば本番に影響ないような小さなトラブルを経験した方が、いざ大きなトラブルが起きた時に思考停止にならないのではと思います。旅公演においては電源の取り方からして毎日違う条件の劇場でやるので、そういう意味で自然に判断力や思考力がつくと思います。「若いヤツには旅をさせろ」ということもあながち嘘ではありません。

僕はもう40年くらいミュージカルの旅公演で、日本全国の劇場を回っていますが、本当に劇場によって響きが違います。僕たち音響はその与えられた条件の中、毎日同じ限られた音響機材と時間を駆使してお客様に作品を届けています。調整がうまくいかない時など、いつも同じ響きの劇場だったらいいのに、とネガティブに考えてしまうこともあります。そんな時は毎日同じ劇場だったら、それはそれで思考停止して成長できないだろうなと、自分に言い聞かせて仕事しております。時には妥協も大事です。こだわりすぎてしまった結果、時間が足りなくなりドツボにハマってしまったことも…。

旅公演は11月17日まで続きます。どこかの劇場でお会いすることがありましたら、よろしくお願いいたします。

（劇団四季音響部）

再びの出動

神奈川県・千葉 真理子

皆さまこんにちは、劇団四季の千葉真理子です。

危険な猛暑が多少落ち着いて、朝晩のクーラーをパワフルに稼働しなくてもよくなってきました。が、しかし今度は地震台風の脅威が襲ってきています。自然のなす事ですからどうにもなりませんが、ハラハラしますね。

「地震カミナリ火事オヤジ」とか言われていますが、全く油断ならない怖いものです。しかしこの言葉、昔(昭和初期ぐらいかな)なら「そうだよねー」と納得できましたが、今の世の中「オヤジ」は怖いものに入るのでしょうか？優しいお父さまが多い気がしますし、お母さまの方が怖いお家もあるでしょうし、各家庭の事情はご本人達でなければわかりませんからね。では「オヤジ」の代わりに何が当てはまるのか？！私だったら、「演出家」かな。

浅利先生にはよく怒られました。先生がその場に登場するだけで空気が激変し、ピンと張りつめた極限の世界(どんな世界なんだー)が現れます。大袈裟ではなく本当にそんな感じでした。浅利先生の指導はビシバシ(あーお腹が痛くなってきた)で、愛(そんな素敵なものじゃない)のムチで鍛えて下さいました。私は先生の大いなる演出の(容赦ない)要求にアワワしつつも、その厳しく険しい階段を登るが如く、緊迫した日々を何とか潜り抜けてきたおかげで、この音響スキルがあるのだと思っています。今となっては笑って語れる懐かしい思い出です。劇団中をよく走り回ったなぁ・・・精神的にも体力的にも、我ながら頑張りました。(はなまる)浅利先生、ありがとうございました。

さて今回の話題は前回に引き続き、バックアップ体制についてお話ししようと思います。

最近やっていた作品も無事引き継ぎが終了して、カンパニーは全国へと旅立って行きました。ひと段落する暇もなく、次の作品へとなだれ込みます。これは開幕業務と、その作品のチーフオペレーターをもう一人作ることが私に与えられたミッションです。自分でやるなら、こうだ！　ではなく、人(後輩)がやるから、こうだ！！というような事を考えながらシステムや音を作っていきます。まぁこちらは順調に進んでいきあと２、３公演やれば終了だね、と言う頃。いきなり電話が！！「ヤバイ引き継ぎに時間をかけすぎたか？」相手のペースを考えてのらりくらり結構ゆっくりやっていましたから。

私「申し訳ありません時間がかかっていますよね、あと３曲で」

上司「で、XXさん(引き継いでいる人)はそれなら大丈夫と言っているけど、どう？」

私「どうって？？」

ここから怒涛のごとく、目まぐるしいことに。

７ヶ月ほど前に色々ありましたが、やっと引き継いだ演目を明日からいきなり(ぶっつけで)やってくれということに。え――――――。もう一生やらないと思っていた(思い込んでいた、思い込もうとしていた)から。その時も結局全幕はトータルで４、５回しかやってないのですが・・・ダメです(夏休みだし、楽しみにしているお客様の顔を思い浮かべると、選択権なし)とは言えず、即座に劇団に行きドタバタな数時間。同僚は「大丈夫だよー、指が覚えているよー」いや、私の10本の指達は決して覚えていない、ビビって震えるだけだ。そんな事を考えている暇はない、勉強だ！出動だ！！

とにかく、バックアップ体制の大切さを、再び実感させ

られる出来事でした。同じカンパニーの中でプラスワンの人員がいて、みんなですべてのポジションができてまわせる体制が理想だと考えますが、なかなかそう上手くはいきません。

で本番はというと、指達(それだけじゃないですけど)が物凄く頑張ってくれて、周りの方々の協力もあり無事任務を遂行する事ができました。あー（ハート)お客様の温かい拍手とカンパニーの皆さまの優しい心遣いに感謝！　でもね、１回ポッキリなら火事場の馬鹿力的に上手くできちゃうのですが、これが１週間とか回数が増えると・・・なにぶん付け焼き刃なもので、ボロがデルデル。

ミキサーが違うとだいぶ混乱するんですよね、これが。実は休憩中にMUTEのボタンとPFLのボタンを間違えて、一瞬声が出ちゃったかもしれないのですが、客席がうるさいのでまったくわかりませんでした。懺悔。フェーダーの感じもだいぶ違うし。

色々やらかしていますが、それでもチーフオペレーターが戻ってくるまで、守り通します～。

では、今回はこの辺で。台風、ゲリラ豪雨、お気をつけ下さい。

（劇団四季音響部）

ホー・ツーニェン エージェントのＡ

神奈川県･百合山 真人

去る4/6 ～ 7/7まで東京都現代美術館にて開催されていたホー・ツーニェンの「エージェントのA」という個展に足を延ばしてみた。今自分が置かれている現在位置みたいなのを再認識できた気がしましたので、何を感じたのか、といったことを掘り下げていきたいと思います。

きっかけは知り合いの演出家の一言であった。とっても良かったから時間あったら行ってみてね、という一言を急に思い出して、稽古が遅い入り時間の際に出かけてみた。ザーザーの雨降る日でもあり、途中でやっぱやめようかな、と思ったりもしたが、演出家が何が良かったと思ったのかを確認する意味でも行こうと思った。

ホー・ツーニェンは、シンガポールを拠点に活動している1976年生まれの48歳である。私とほぼ同世代でありながら、世界中で活躍しているアーティストである。

ホームページによると「東南アジアの歴史的な出来事、思想、個人または集団的な主体性や文化的アイデンティティに独自の視点から切り込む映像やヴィデオ・インスタレーション、パフォーマンスを制作してきた。既存の映像、映画、アーカイブ資料などから引用した素材を再編したイメージとスクリプトは、東南アジアの地政学を織りなす力学や歴史的言説の複層性を抽象的かつ想起的に描き出す。」とある。

つまり、今我々がいる世界を東南アジアという一世界から切り取り、そこから鑑賞者の現在の立ち位置を問われているように感じた。西洋の方が観る時の感情と同じ東南アジアに住む日本人として観る時の感情はまた異なるものになるであろうと感じた。

東南アジアというのは歴史的な背景を鑑みても、イギリスやフランス、オランダ、アメリカ、スペインなど数々の

国から植民地化されてきた。しかし、植民地化されながらも、いかなる言語、宗教、政治体制によっても統一されることはなく、東南アジアの総体性をもたらすものは何かという問いも同時に投げかけている。

その時代に生きるキーポイントとなる人物に焦点をあて、色々な角度からそれを提示する。第二次世界大戦中、イギリス軍を降伏させ「マレーのトラ」と呼ばれた軍人山下奉文など、シンガポールの歴史における支配と被支配の関係が、姿を変え続けるトラと人間を介して語られるものなど、同じ日本人として突きつけられるものがあった。

そして、お目当てといいますか、楽しみにしていたものの一つに「VR体験」がある。人生で初めてのVR体験でとても刺激になった。タイトルは「ヴォイス・オブ・ヴォイド 虚無の声」である。歴史の中に埋もれた声がテーマとなっている。

一人3畳ほどに仕切られた畳の部屋に案内され、VRゴーグルを装着することで作品が始まる。「茶室」「監獄」「空」と呼ばれる3つの空間を自らの動き（立ったら空・座ったら茶室・寝そべると監獄）をすることで各空間を行き来できる。自らの動きから全ての物事が始まっていき、否応なくその状況を突きつけられる。その時間の不可逆性というか、戻れない時間の中をただ進むしかないというこの状況は、生きていることに他ならないし、実際に戦争を体験はしていないが、その時代に耳を傾けることでVRゴーグルを外した先に未来を感じずにいられなかった。つまり、自分も声を上げたい、と感じた。

今作の観客に向けてホー・ツーニェンがこんなメッセージを送っている。

「歴史というのは生きています。私たちは歴史の中を生きていると言えます。生きているということは変えることができるということ。私たちは過去を、そして未来を変えることができます」

歴史に埋もれる声なき声が世界中にはたくさん溢れています。過去を咀嚼し、今置かれている現在へ、そして未来へと変革していきたいと感じました。紹介してくれた演出家には長々と御礼のメールを送りました。

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

（舞台音響家）

▼△▼△▼△▼

『東西とーざい』は、オープンな投稿コーナーです。

仕事のことから、心の声まで、なんでも構いませんので、胸にあることを文にして、下記までお送り下さい。

締切りは、偶数月末。

お送りいただいた方には、原稿料をお支払いしています。

《協会誌編集部
pub.ssaj@nifty.com》